P-043

当院の初診受付体制の変更による発達外来診療の変化

森　愛実[1]、菱谷　好洋[2]、蒔田　恭子[3]、山本　知加[2]、橘　雅弥[2]、毛利　育子[2]、谷池　雅子[2]、下野九理子[3]
[1]大阪大学医学部附属病院　子どものこころの診療センター
[2]大阪大学大学院　連合小児発達学研究科
[3]大阪大学大学院　連合小児発達学研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター

【目的】
大阪大学医学部附属病院小児科発達外来では、従来は申込みを患者家族から受ける自費診療と近医からの紹介による保険診療の2通りの初診受付体制とし、殆どの申込みを受け入れていたため受診までに1年以上の待機が生じていた。長期待機児の課題解消と高次医療の役割を担うことを目的に、2020年4月より、地域の医療機関からの紹介を経た患児を年齢や主訴などを基に優先順位を考慮し受け付け、受け付け困難な場合にはセカンドオピニオン外来や診療機関マップのサイト紹介を行い、待機が2ヵ月程度となった。体制変更前後での発達外来初診患者の特徴の変化を検討する。

【方法】
2018年4月～2020年3月(旧体制)、および2021年4月～2023年3月(新体制)の期間に発達外来初診を受診した患者の初診時年齢、性別、知的発達の遅れの有無、当院での診断名の割合、初診申込時の居住地域、初診申込者に対する初診予約キャンセル者の比率を検討した。

【結果】
初診総患者数は旧体制429名、新体制340名であった。旧体制で受診した患者は平均6.4歳(±3.3SD)で5-6歳が最も多く、男子が全体の77%、知的発達は遅れありが29%、最も多い診断名が自閉スペクトラム症(ASD;86%)であった。居住地域は77%は当院が位置する北摂地域であったが、遠方からの受診も16%あった。初診申込者の9%が予約をキャンセルしており、無断キャンセルもあった。新体制で受診した患者は平均6.3歳(±3.0SD)で5-6歳が最も多く、男子が71%、知的遅れありが25%、ASD診断は79%であった。居住地域は北摂地域81%、その他地域からの申し込みは転入予定や院内紹介であった。予約キャンセルは初診申込者の2%で、旧体制に比して低下した。

【考察】
体制変更前後で発達外来を受診する子どもの特徴に大きな違いはなく、ともに就学前の5-6歳での受診が多く、男児が7割強、知的遅れありの子どもが3割程度であった。一方で受診の窓口をかかりつけ医の紹介のみとした新体制では、近隣地域に居住している割合が増加しており、医療や福祉、教育を含めた地域連携につながる重要な変化であった。また、待機時間の長さによる発達・状態の変化や他院受診等による急なキャンセルが減少したことで、その時に支援を必要としている患者への医療提供ができる体制となったと考えられる。

P-044

自閉スペクトラム症の幼児への早期療育 –1事例における変化のプロセス–

蒔田　恭子[1]、山本　知加[2]、藤野　陽生[2]、橘　雅弥[2]
[1]大阪大学大学院　連合小児発達学研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター
[2]大阪大学大学院　連合小児発達学研究科

【背景】
自閉スペクトラム症（ASD）児は、共同注意や他者との関わりといった対人相互性の発達プロセスに困難があり、早期介入が重要とされている。今回、ASD診断のある幼児に対して発達早期の段階で個別療育を実施したため、その経過を報告し、介入中にみられた対人的スキルの発達のプロセスを検討する。

【症例】
2歳2カ月で大学病院発達外来に受診し、医師の診察によりASDと診断された女児で、自閉症診断観察スケジュールの結果は重度であった。2歳10か月の介入開始時に行われたアセスメントでは、援助要求のために大人に物を渡すことはあったが、意思伝達を目的とした発語や発声、指さしはなかった。模倣はおもちゃの操作法でのみ見られ、共同注意行動や大人との関わりを求めることもほとんどなかった。介入は、養育者同席のもと心理士と女児の1対1での遊びという形で、およそ月2，3回1時間、全26回、約1年間実施した。応用行動分析（強化、プロンプト、フェイディング等）と機軸行動発達支援法（子どもの行動と関連した強化子の使用、子どものリードに従い遊ぶ等）の手法を用い、要求、共同注意行動、模倣をターゲットとして介入した。1回目から5回目までには、手を差し出すことでの要求行動(3回目)、指差し追従(4回目)、身振りの模倣(4回目)、「う」の口形模倣(5回目)が可能となった。6回目から10回目には、視界内の物への指差しによる要求(6回目)、「見せて」の指示でおもちゃを見せる(7回目)、視線追従(8回目)、遊びの中での発声模倣(8回目)が可能となり、頻度は少ないが単語模倣(10回目)も聞かれるようになった。それ以降26回目までの様子として、見えていない物の指差しでの要求(16回目)、自発的に養育者におもちゃを見せる(18回目)ことが可能となった。

【考察】
本症例の経過から、ASD児への早期介入により共同注意や模倣などの対人的スキル習得を促進できる可能性が示唆された。本症例の発達のプロセスは、8か月頃からの定型発達児の社会性発達とおおむね同様の軌跡であった。定型発達児の発達プロセスを考慮することは、社会性の発達に遅れがあるASD児への早期療育においても重要であると考えられる。発達早期段階でのスキルの獲得は、今後の日常生活場面での患児の社会的学習を促進する可能性があると考えられるため、長期的な検討が求められる。

Presented by Medical*Online